

# 産 教 連 通 信

技術教育と家庭科教育のニューズレター

産業教育研究連盟発行  
<http://www.sankyoren.com>

目 次	
□ 今夏の全国研究会の内容がほぼ決まりました	1
□ エッセイ「産業革命はファッションを変えた」 日下部信幸	2
□ 連載「産教連と私(3)」 三浦基弘	4
□ 連載「農園だより(70)」 赤木俊雄	17
□ 常任委員会報告	18
□ 編集部ならびに事務局から	20

## □ 今夏の全国研究会の内容がほぼ決まりました

世界のあちらこちらで紛争や戦闘が続発している状況に加え、地球温暖化の影響とおぼしきさまざまな気象現象も引き続き起きています。日本では、前述の紛争の影響で、輸入に大きく依存している石油およびその関連製品の調達が困難になり、日常生活に大きな影響が出始めています。

ところで、現在、次期学習指導要領の改訂へ向けて、中央教育審議会(中教審)で審議が進められています。今年(2026年)中に答申が出され、それを受けて改訂学習指導要領が発表されるのではないかとともにささやかれています。そのようななかで新年度の2026年度がスタートしました。子どもたち皆が皆、これからの生活への期待に胸を膨らませ、希望を抱いて学校へ通えるようになってほしいと願っています。

さて、今夏も、全国研究会(第75次技術教育・家庭科教育全国研究会)を例年と同じように実施します。日程や内容についてほぼ決まりましたので、以下に紹介しておきます。

日 程：8月1日(土)午後、8月2日(日)午前の一泊二日

場 所：東京都教職員組合北多摩西支部北多摩西教育会館  
 (会場は JR 国立駅下車 徒歩約8分の場所にあり、昨年と同じです)

内 容：8月1日(土)——基調提案と討議, 授業づくりの視点Ⅰ  
 8月2日(日)——授業づくりの視点Ⅱ

なお、今年は、両日とも、研究会の最後に会員向けの会議(連盟総会)を設定し、例年より多くの時間を割いて、今後の活動について意見交換をする予定です。

年度初めの今、夏の研究会参加を予定に組み入れておいてくださるとありがたいです。

# 産業革命はファッションを変えた

—綿から糸・布作りは産業革命の原動力—

岐阜女子大学(非常勤)

日下部 信幸

## ■ 三大紡機と蒸気機関の発明

産業革命前、フランスのロココスタイルは貴重なシルクの布であったので、貴族ファッションでした。産業革命時代になると、イギリスでは綿布が普及し、富豪族ファッションが生まれました。

18世紀前半までのイギリスは、フランスやオランダ、スペインなどより経済的に遅れていました。なぜ世界に先駆けてイギリスで産業革命が興り、イギリス人が綿製品で富豪族ファッションを生み出したのでしょうか。

15世紀末にコロンブスが新大陸を発見してから、ヨーロッパ諸国は大航海時代を迎え、大型帆船で新世界に向かいました。スペインのピサロらは、1533年、ペルーに上陸し、インカ帝国の財宝をヨーロッパへもたらしました。その中に綿花や綿織物がありました。当時ヨーロッパでは、貴族はシルクロードでもたらされた柔らかく美しく染めた絹織物を身に着けていましたが、庶民はちくちくする毛織物と硬いリネン(亜



写真1 ジェニー紡機

麻織物)の衣服でした。多くの人は、柔らかくて肌触りがよく、洗濯しやすく衛生的な綿織物に触れて感動しました。

ヨーロッパでは、ペルーや西インド諸島の綿の種を植えても、うまく育ちません。そのため、新大陸やインド、トルコなどから貴重な綿花を調達して、羊毛や亜麻の糸と綿糸を交織にした布(ファスチアン)で、少しでも肌触りのよい布を作っていましたが、糸車では綿糸を大量には作れないのです。



写真2 水力紡機

イギリスでは、綿製品の要望が大きいため、綿糸が大量にできる機械の開発を奨励していました。これに応えたのが、綿を紡ぐ三大紡機の発明です。柔らかく肌触りのよい綿製品に触れてから、200年以上も経っていました。

三大紡機とは、1764年のハーグリーブスのジェニー紡機(写真1)、1769年のアークライトの水力紡機(写真2)、1779年のクロムトンのミュール紡機(写真3)です。これらの紡機は発明当初は手回しでしたが、その後大量生産できる洋式紡績法になり、また、動力が水力から蒸気機関に変わり、工場は辺鄙な川沿いから労働

力のある都市部に移って大工場を建て、綿糸や綿布が大量に造られるようになりました。産業革命は三大紡機とワットの蒸気機関の四大発明による結果です。

綿が育たないイギリスは、原料の綿花を新大陸で栽培して確保しました。特に植民地のアメリカ南部は綿が良く育ちました。労働力はアフリカからの奴隷でした。そして綿栽培の労働者は、400万人を超えていました。



写真3 ミュール紡機

## ■ 綿は産業革命の重要産物

イギリスの産業革命は、三大紡機の発明を機に1760年代に始まり、1850年代に終わったとされています。この間に綿糸・綿布は大量生産されて、世界に輸出されました。紡績機械も輸出されるようになり、わが国も薩摩藩の紡績機械輸入をきっかけに、明治政府はイギリスから2千錘(1錘で1本の糸)規模の紡績機械やボイラーなどを輸入して、官営工場を10か所建てて綿糸の生産を始め、産業革命の基となりました。

1830年代にフランス、ベルギー、アメリカ、1850年代にドイツ、1860年にロシアもイギリスから紡績機械を購入し、綿紡績から産業革命を興しました。戦後はトルコ、中国、インド、パキスタンなど綿花栽培地の国は綿紡績で産業革命を興しています。このように、綿は産業革命を興す重要な産物でした。

綿は産業革命を興しましたが、ファッションにも大きな影響を与えました。シルエットの図(図1, 図2, 図3)は1810年代から1940年代までのイギリスのファッションです。綿布を多色にプリントできる機械が生まれ、美しく彩色されたコットンプリントの衣裳は、産業革命で成功した人々の心をとらえました。



図1 1810~1840年代のファッション

古代から多くの布を使ったボリューム感のある衣服は、権力や富の象徴でした。産業革命で富を得たブルジョアジーの女性たちは、コットンプリントの布で次々とスタイルを変化させて、富豪族ファッションを生みました。富豪族ファッションは、スカートを広げるためにクリノリンという鳥かごを大きくしたような腰枠を使って、ボリューム感を出しました。産業革命が終りに近づいた頃は、庶民も富豪族ファッションを楽しむ人が出てきました。

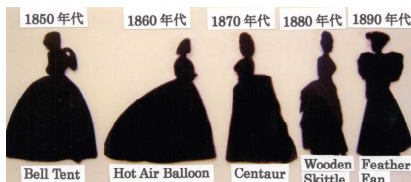


図2 1850~1890年代のファッション

産業革命は綿によって生まれ、綿のファッションを生み出したのでした。

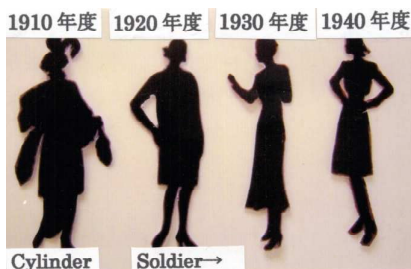


図3 1910~1940年代のファッション

### <註>

写真1~3：トヨタ産業技術記念館展示品

(シルエットの図: Abington Museum, Northampton in U. K.)

## ドイツ民主共和国の総合技術教育を見聞した旅

### ■ DDRの教育視察旅行の企画

この頃(1975年前後)、産教連でソ連、ドイツ民主共和国(DDR)の総合技術教育のことが研究対象の一つになり、清原道壽さん、諏訪義英さんがDDRの小学校・中学校の教科書を機関誌「技術教育」などで紹介されていた。

たとえば、「技術教育」(1972年8月号)は、特集「技術・家庭科教育研究の現状と動向」を組んでいる。清原さんは、これに「総合技術教育と日本における実践上の課題」の論文を書いている。その中に「……総合技術教育の原理は“すべてを教えることをもとめるのではなくして、現代産業の一般の基礎を教えることをもとめる”というレーニンの指示にしたがい、教授と生産的労働の事実上の結合を保証し、“生産の主要部門を理論と実践にもとづいて学習することを保証する”ことが必要である」とし、そして、戦後いち早く生産教育論を提唱した城戸幡太郎の中核となる「総合技術教育」も紹介している。彼の総合技術というのは、「単なる特殊な技術を寄せ集めた技術でもなく、またそれらに融通のきく一般的基礎技術でもなく、技術に関する総理解である。そして技術に関する総理解というのは、人間の社会生活にとって科学がどのような文化的意義を有するかを理解することである」としている。

ある時、諏訪さんに「DDRにいつ行かれたのですか？」と尋ねると、「行ったことはない」そして「清原先生も行ってないよ」という返事があった。「DDRに視察訪問する学校教育を調査できて、いろいろ具体的なことがわかりますね。行きませんか？三浦も総合技術教育に関心がありますから」「そんなに簡単にDDRに行けないでしょう」というのが諏訪さんの返事だった。「じゃあ、三浦が下見に行ってくださいよ」と軽く請け負ってしまった。

常任委員会に提案すると、「大丈夫かな？」というのが大方の意見だった。視察旅行が実現できるかわからないが、下見に行くことはいいだろうと、常任委員会です承された。

### ■ DDR大使館と日本ドイツ民主共和国友好協会

1975年の12月、まず大使館の電話番号調べから始めた。104番に電話して、「おそれいりますが、東ドイツ大使館は何番でしょうか?」。やさしく、美しい声で交換の女性が「ちょっと、お待ちください。……申し訳ございませんが、お申し出の大使館はありません」「エエ!そんなはずはないんですがね」と私が言うと、「あのオ、ドイツ民主共和国大使館ならありますけれども」と言われ、すかさず「それぞれ、それぞれ」という始末だった。この程度の認識で計画が始まった。

DDR大使館に行くと、旅行は日本の民間団体である日本ドイツ民主共和国友好協

会(以下、友好協会)を通してほしいとのことだった。友好協会は1960年代から DDR に関する学術・文化交流の情報を発信していた。日本と DDR は1973年に国交回復しているが、文化協定を締結しておらず、大使館交渉は難しいということであった。私が友好協会の会員になって、日本と友好協会双方から情報を収集して、ドイツ行きの計画を準備した。

## ■ 下見にDDRに飛んだ

1976年3月、DDR への筆者単独の下見旅行が実現した。DDR の友好委員会の窓口はゴールドシュミット女史と「教師の家」の教師クロイツガーさんだった。

私の視察訪問計画の希望は、10年制学校(Polytechnische Oberschule 略称 POS)、職業学校、総合技術センター、総合技術教育研究施設、ドレスデン工科大学、ピオニール宮殿などを訪問することであった。話し合いの結果、ドイツ側から各学校の施設と連絡をとり、実現できるよう最大に努力する。条件として、①最低4日間は滞在してほしい②ドイツ側としては、社会主義建設と教育の話をしたい(干渉するわけではない)③日独双方の委員会・協会を通じて連絡を取り合いたい④通訳を最低1人は連れてきてほしい⑤訪問する教師の名前、学校名などのリストを送ってほしいとの提示があった。

打合せ後、10年制学校の訪問は、当時、風邪が流行っており、子どもを守る観点から遠慮していただきたいと言われ、ベルガモン博物館の見学に変更した。

## ■ 第1回視察旅行の事務局発足と視察旅行団の結成

帰国してから常任委員会にかけ、旅行団を結成することを決め、事務局を設置した。団長は清原さんの予定だったが、健康上の理由で諏訪義英(大東文化大学)さん、副団長は向山玉雄(東京都葛飾区立奥戸中学校)さん、事務局長は三浦基弘(東京都立小石川工業高等学校)に決まった。旅行業者は近畿ツーリストに頼み、宣伝費、パスポート作成費など数十万円の経費節約に努力し、旅費を安くすることに努力した。団員募集に関しては、機関誌「技術教育」「産教連通信」に加え、会員のクチコミなどで30名組織することにした。

一方、友好協会に連絡し、1976年度の協定に産教連の訪問の協力を要請した。「日本ドイツ民主共和国友好協会とドイツ民主共和国-日本友好委員会との間の1976年における協力のための協定」は次のようになっている。「日本ドイツ民主共和国友好協会(以下、友好協会という)とドイツ民主共和国-日本友好委員会(以下、友好委員会という)の代表は、両組織間の相互協力および日本とドイツ民主共和国両国民間の友好・親善と相互理解とを促進するため、1976年7月、ベルリンにおいて会談した。

1973年5月、両国政府間に外交関係が樹立されて以来、政府レベルや各界における両国民間の交流は広がりつつある。双方は友好協会と友好委員会との相互協力が両国民の真の友好と相互理解とをいっそう促進するうえで重要な意義をもっていることを確認し、前年に引き続き1976年においても、双方の協力関係を維持、発展させること

に同意した。広範な日本国民の間に、ドイツ民主共和国についての関心が高まっている。

友好協会は、ドイツ民主共和国の生活と文化、各分野における達成、ドイツ民主共和国国民の世界平和実現への努力についての正しい理解を日本国民の間に広めるよう努力する。

友好委員会は、日本国民の生活と文化、その平和と民主主義と生活向上のための闘いについての正しい理解をドイツ民主共和国国民の間に広めるよう努力する。

双方は、日独文化交流の長い歴史と伝統とを考慮し、日本とドイツ民主共和国との間の文化交流をいっそう促進するため、次の通り1976年の協力協定を結ぶことに合意した。……友好委員会は友好協会の推薦する次の視察団の見学を組織することにより、日本のありとあらゆる社会分野の代表が、ドイツ民主共和国での現実の社会主義を知ることができるようにする。身体障害者視察団、大阪婦人代表団、産業教育研究連盟（下線は筆者）、国民文化会議、……。また、「日本とDDR」（日本ドイツ民主共和国友好協会の機関誌 No.16, 1976. 10）に、1976～77年の活動の中で次のように書かれている。

「(1)両国民の友好・親善と相互理解をすすめる活動…… (2)人的交流に努力する活動…… (3)訪問・視察団への協力 まじめにDDRを訪問・視察したいという旅行団への協力を続けます。さしあたって、明春予定されている産業教育研究連盟(技術教育研究団体)（下線は筆者）のDDR訪問(約30名)に協力することが常任理事会で決定しています」。

これらのことが、DDR訪問に大きな援助となった。同時に参加団員も着実に集まり、当初予定した人数を上回り、35名で打ち切りにした。通訳については、諏訪団長の計らいにより、現地のフンボルト大学の日本人安井栄一氏に依頼し、旅行中の健康管理にI先生の参加を可能にし、低額で安全にかつ有意義な視察旅行ができるよう万全に整えた。

こちらからDDRに出した手紙の返事は、友好協会を通して1977年2月4日付で届いた(原文略)。内容は視察場所と日程についてであったが、10年制学校がなく心配であった。この手紙が届く前に、別の用事で来日したゴールドシュミット女史に、諏訪団長、筆者と旅行者の4人の打合せ、また別な日に友好協会の招きで日本語を学びにいらしたモイツナー女史、諏訪団長と私の3人での打合せで確認した。確認したという意味は、10年制学校を訪問することが主であるということであった。そして、この旅行は日本の民間教育研究団体が注目し、成果を期待しているし、この旅行が成功をおさめれば、日本とDDRの教育運動の友好に多大な影響を与えることもつけ加えた。

再度、手紙を出して10年制学校訪問の実現を求めたが、1977年3月3日付で届いた具体的な計画書には10年制学校は載っていなかった。

これでは旅行の主旨がなくなると判断し、期日が迫っており、国際電話をかけた。なにせ国際電話は初めての経験だった。筆者は通話相手のモイツナー女史と面識があり、日本語がある程度できるので、日本語、ドイツ語、英語のチャンポンでいこうと

思い、DDRの友好委員会に電話をかけた。出発1週間前であった。

時差は8時間、日本時間午後5時、DDR 時間午前9時であった。電話交換手がつながったとの連絡までわずか5分で、世界は狭いと実感した。

筆者が“Allo! Freundschafts Komitee Deutsche Demokratische Republik-Japan”という、女性の声で“Ja”、続けて私が“Vom Japan, Reise gruppe des Verbandes der Lehrer. Meutzner bitte.”。あちらは“Ja, einen Moment.”。少し時間が経って“モイツナーです”“サンキョウレンの三浦です。わかりますか”“わかります。三浦さん”“実は、10年制学校のことですが、こちらでいろいろ努力したのですが、だめになりました”“ええ、困ったね。これじゃ、そちらに行く意味がなくなります”“じゃあ、やめますか”“そんな、急に言われても困ります”。この会話の後、突然、電話が切れ、再度、電話したら外出した後でした。後から訪問してわかったのであるが、モイツナーさんが文化省など実現するため、かけ合ってくれたようだ。

急にやめるわけにもいかず、友好協会と相談し、現地で再度打合せをすることに決めた。ともあれ、第1回産業教育研究連盟主催ドイツ民主共和国総合技術教育の研究視察団一行35名(内訳：男性29名、女性6名。勤務先別：小学校1名、中学校男性13名、女性3名、高校男性11名、大学男性3名、養護学校男性1名、女性1名、聾学校男性1名、学童保育女性1名。年齢別：20代9名、30代13名、40代11名、50代2名。)、添乗員2名の計37名が、3月27日、羽田を発つことになった。

### \* 日程とコース \*

- 1977年3月27日 13:00 結団式 東京都港区勤労福祉会館。羽田発21:30 ルフトハンザ航空 DC10型機でアンカレッジ経由西ドイツハンプルグへ(機内泊)
- 3月28日 06:05 ハンプルグ着。パンナム機に乗り換え、西ベルリンへ。専用バスで東ベルリン。シュタット・ベルリンホテル(欧州一の規模を誇る37階建 200ベッド)着。昼食後、東ベルリン市内見学。
- 3月29日 東ベルリン滞在。午前中、諸国民友好委員会訪問。午後、「教師の家」訪問。(シュタット・ベルリン泊)
- 3月30日 専用バスで東ベルリンより約180km 南に離れたドレスデンに向かう。午前中、ドレスデン工科大学訪問。午後、ピオニール宮殿訪問。(シュタット・ベルリン泊)
- 3月31日 午前中、国営ベルリン化学工場内の職業学校訪問。その後、市内自由行動。夜、ベルリン・シンフォニー・オーケストラ観賞。(シュタット・ベルリン泊)
- 4月01日 早朝、東ベルリンを発ち、西ベルリンより空路フランクフルト経由でパリへ。パリ市内見学。夜、ムーランルージュ観賞。(LPM サンジャック泊)
- 4月02日 午前中、エコール・ポリテクニク訪問。午後、パリを発ち、空路イタリアのミラノへ。夜、スカラ座で「シンデレラ姫」を鑑賞。(ア

ンブロジーアーノ泊)

4月03日 早朝、ミラノを立ち、空路ローマに向かう。着後、午前・午後市内見学。(レジデンスパレス泊)

4月04日 ローマを立ち、シンガポール航空でフランクフルトに向かう。乗り継ぎに3時間の余裕があったが、5時間遅れたため、フランクフルトで東京に向かうルフトハンザ航空に乗れなかった。午後、アエロフロート・ソ連航空でフランクフルト発モスクワ行きに搭乗。モスクワで東京行きの便に乗り継ぐ予定が、ここでも不可能。やむなくモスクワ泊。

4月05日 いつ搭乗できるか不明。ソ連政府観光局の手配によるバスで、わが視察団はモスクワ市内見学。夕刻の便の搭乗券が、近畿ツーリスト同行者の日置、望月両氏と三浦事務局長の努力で入手できた。しかし、予定の便に乗れず、またもや待合室で待機。21:30の便で搭乗が可能になる。アエロフロート航空イリュージン62M ジェット機で帰国の途に着く(機内泊)。

4月06日 予定より1日遅れで、12:30 無事羽田着。解団式後、解散。

## ■ 10年制学校について

10年制学校については、1977年2月、DDR の文化省で生徒、教職員の労働の過重という理由で、諸外国の視察団受け入れを当分中止することになったそうである。しかし、職業学校での学生に10年制学校時代の経験話を聞くことができたので幾分か、補充された面があったことと思っている。DDR では教師の家、ドレスデン工科大学、ピオニール宮殿、化学系職業学校で多大な歓迎を受け、旅行団員の多くがこの旅行に満足しており、事務局の努力が実を結び、一同喜んでいる。

最後に、友好協会の事務局長一條元美さん、事務局の村本さん、近畿ツーリストの日置さん、望月さん、常任委員の皆さん、その他多くの方々のご協力によりこの旅行が成功したことを付言する。

視察旅行の成果のひとつとして、『ドイツ民主共和国の総合技術教育 子どもの全面发展をもとめて』<sup>1)</sup> 産教連編 民衆社 1977年8月)を纏めた。

## ■ 第2回視察旅行報告

第1回 DDR 総合技術教育視察旅行団を組織したのは、1977年のことであった。DDR に、日本民間教育研究団体連絡会(略称、民教連)加盟団体のひとつである産教連が主催して、訪問するのは初めてであった。第1回の視察旅行団を組織するにあたっての詳しいことは、「技術教育」1977年7月号(国土社)、『ドイツ民主共和国の総合技術教育』(産教連編 民衆社 1977年8月)に載っているし、本稿でも触れたので、割愛する。

第2回の視察団の主な目的は、10年制学校(正式名は一般陶冶総合技術学校)と生産労働を視察することであった。第1回の時も希望をしたが、最近、各国からの視察希望が多く、子どもたちの授業が妨げられ、教師の労働が増えるということで、断わら

れた。また、子どもは見せものではないので、遠慮してほしいということであった。

先ほども紹介したが、視察旅行の報告として『ドイツ民主共和国の総合技術教育』を刊行し、DDR の国民教育省、DDR 日本友好委員会(以下、友好委員会)に贈ったこともあり、友好委員会より、「DDR の教育のことを良心的に紹介してくれて、とても感謝しています」という連絡が、日本 DDR 友好協会(以下、友好協会)を通してあった。詳しく聞くと、あのような本を出版したのは、初めてのことであった。

第1回視察旅行もそうであったが、主たる目的は10年制学校訪問であったので、第2回は、どうしても視察しなかったわけである。出版した本中の10年制学校のことは、日本で手に入る文献の紹介以外は、職業学校に訪問したとき、その学生から10年制学校時代の感想を聞いて、紹介した程度なので、不十分な内容であった。

1978年に入って、友好委員会に10年制学校の視察の可能性について手紙を出した。また、友好協会の常任理事である潮見俊隆(東京大学教授)が、フンボルト大学に招待された機会に、10年制学校視察の可能性について、連絡をした。その結果、可能性があるということであったので、この年の8月に筆者が打合せに DDR に飛んだ。

8月14日、友好委員会で第2回視察旅行について話し合った。DDR 側は、ロルフ・グルネバルト、ピーター・ベアトレック氏、日本側が、潮見さんと私だった。DDR の教育施設を視察するとき、三つの部署より許可をとらなければならないことがわかった。10年制学校の視察は、国民教育省の管轄。職業学校関係の視察は、経営職業学校庁の管轄。単科大学、総合大学の視察は、高等教育省の管轄であった。その結果、10年制学校を視察できるかできないかは、まだはっきり言えない。もし視察できたとしても例外として認めることになり、そして視察する場合は少人数に限るという。

11月までに実現できるように友好委員会として努力するということがあった。友好委員会との感触がよく、また文化省も私どもの団体について理解しているようであったので、産教連の常任委員会に計って、視察旅行を実施することになった。

しかし、準備が第1回と比べて短いことと、団員がすぐ集まるかという不安があったが、要綱を作り、機関誌、産教連通信に発表した。当初、団長は未定であったが、10月に、産教連の生みの親でもある清原道壽さんに決まった。清原さんは第1回の時も団長の予定であったが、ご病気で行けなかった。その後の1978年8月、DDR に訪問された。清原さんは「名」ばかりの団長ではなく、忙しいなかを貴重な教育資料を作成され、機関誌に紹介され、この旅行の質の高さを身をもって示してくださった。

10月には、来日した友好委員会の会長であるフィッシャー氏と会う機会をもち、今度の旅行に関して格別の配慮をしていただきたいと要請した。11月末には、友好協会より10年制学校視察は、ハレ県の学校と連絡が入った。これで安心はしたが、全員見学ができるかどうか不安であった。

何度かの国際電話で、全員(22名)見学 OK とわかったのは、2月の末のことであった。第1回の時もそうであったが、日本での旅行計画に1年前からするのは当然のことだが、DDR ではとても早すぎるという習慣である。そのこともあり、とても交渉しづらいことがある。

## ■ 第2回視察団結成と10年制学校訪問の実現

一応の準備を整えて出発することになったが、間に清原道壽さんが急病で倒れ、急遽、保泉信二さんに団長をお願いし、研究視察団一行21名(男性14名、女性7名)で出発することになった。3月25日に出発し、より多くの成果を上げて、4月4日に無事帰国できた。

### \* 日程とコース \*

- 1979年3月25日 成田発 11:15 アエロフロート航空でベルリンへ 同日21:00 シェーネフェルト空港着。(ベルリン泊)
- 3月26日 ペルガモン博物館、歴史博物館、建国宮殿見学。(ベルリン泊)
- 3月27日 ツヴィンガー宮殿、交通博物館見学。オペラ(ドレスデン スターツカペレ) “リゴレット”。(ドレスデン泊)
- 3月28日 マイセン陶磁器、アルブレヒト城他見学。(ライプチヒ泊)
- 3月29日 POS Völkerfreundschaft (10年制学校)、VEB Zemag Zeis (生産工場)、総合技術センター・キャビネット視察。(ライプチヒ泊)
- 3月30日 ライプチヒ工科大学(土木・建築)視察。(エアフルト泊)
- 3月31日 ワイマール見学。ゲーテ、シラー、リストに関する家、作品、墓など。(エアフルト泊)
- 4月01日 8:32 フランクフルト行汽車。歴史、自然博物館見学。フランクフルト18:45 発 ヒースロー空港 20:10 着。(ロンドン泊)
- 4月02日 ロンドン市内観光。夜、コンサート(ローヤル・アルバートホール)。(ロンドン泊)
- 4月03日 ヒースロー発 12:20 アエロフロート航空でコペンハーゲンへ。コペンハーゲン発 15:20。
- 4月04日 成田着 16:30 解散。

この旅行に際して多大な尽力をいただいた友好協会の一條元美事務局長、近畿日本ツーリストの田中哲男さん、その他関係者の皆さんに感謝したい。

## ■ 10年制学校(オーバーシューレ)での工作教育の状況

以下の記述は参加者の清原みさ子さんの報告(筆者が一部、加筆した)である。

### (1) 学校での工作と生産実習

訪問した諸国民友好学校(写真1 Polytechnische Oberschule 略称 POS)は、ハレ県ツァイツというライプツィッヒから35km 離れた市である。この学校には工作室は2つあり、一方で電気関係、理論的な授業をやり、もう一方で木工も金工も全部やるようになっている。学校の工作室を使うのは6年生までで、それ以上は生産の中の授業日があって、生産実習を行うようになっている。6年生で金属加工をするが、手作

業でやるものだけで、機械加工は工場で施設を使わせてもらう。したがって、学校の工作室には、施盤、フライス盤などは置いていない。6年生の金属加工では、基礎的な手順を教えることをやり、ここで作ったものは後で教材に組み合わせたりするので、学



写真1 10年制学校で視察団とDDRの教職員  
(提供：清原みさ子)

校に残しておく。生産実習の中で簡単な部品を作らせ、それを全体の生産計画の中に組み込ませ、生産計画に対する責任と厳しさを養うということである。また、社会的有用物製作時の材料加工というのが4年生からあり、ここでの製作品は連帯バザールなどの時に売り、売り上げは連帯基金へ出し、ベトナムへ送られたりする。社会のための生産が主になっているが、家に持って帰ることもあるという。

## (2) マトリョーシュカのヤスリがけ 木工などの総合工作室での様子

ここでは、工作担当の女教師の指導のもと、4年生が木材(厚さ1cm 強、合板のようであった)にヤスリがけをしていた(写真2)。工作台1台に1人で、それぞれ自分で描いたマトリョーシュカ(マトリョーシカ)の「完成図」を置いている。半クラス15名だが、欠席者がいて、実際には12名だった。生徒たちは板にマトリョーシュカの形を描き、糸ノコでまわりを大きく直線的に切ったのち、ヤスリがけをしていく。この時間は、みな万力にはさんでヤスリをかけていた。ヤスリがけの仕方の習得をねら



写真2 マトリョーシュカにヤスリをかける女生徒  
(提供：清原みさ子)

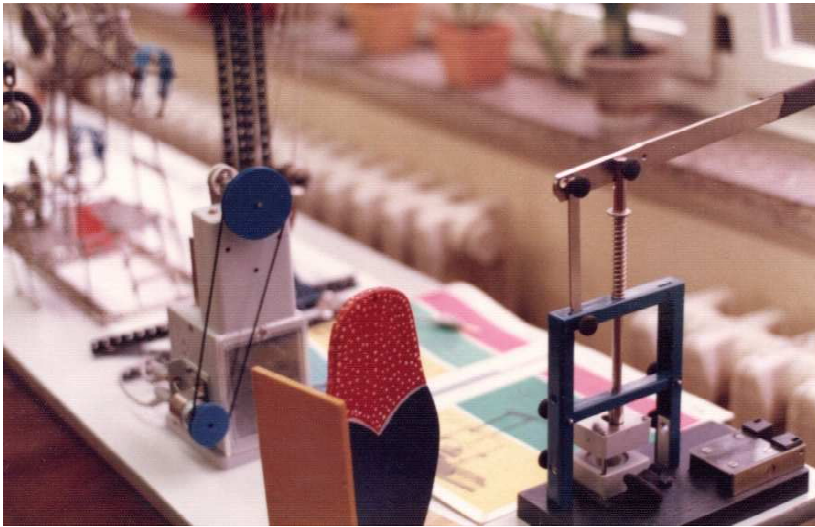


写真3 作品の見本(中央がマトリョーシカのブックエンド)  
(提供：清原みさ子)

っているので、ヤスリで削らなければならない部分が多く、かなりの仕事量である。生徒たちは、女の子も男の子も、結構慣れた手つきで、ヤスリがけをしている。授業時間は45分間で、教師は机間巡視しながら、削り方の手本を示している。うまく

いかなかったり、わからないところのある生徒が手を挙げると、教師はまわって来て応えている。

個々の生徒を見ていると、作業進度にかなりの差がある。この日は欠席者がいたので、その関係かもしれないが、ほぼマトリョーシカの形ができている生徒もいれば、半分も削れていない生徒もいた。なかには糸ノコで切ったときに、マトリョーシカの形を少し落している生徒もいたので、技能の獲得という点で、やはり個人差がかなりあるようであった。

このマトリョーシカは、ブックエンドにもなるという話であった。そして、やはり「連帯バザール」の時に売るということである。この室内には、マトリョーシカのブックエンド T・B (Technische Baukasten 技術的組み立て実験装置)、その他見本が置いてあった(写真3)。扉つきの引出し式道具棚もあり、のこぎり、かなづち、ハンド・ドリルなどが整然と並べられていた。また、安全に対する注意も掲示されていた。

### (3) T・B作業—丸のこの組立

こちらの教室では、やはり女性の教師の指導のもと、T・B 作業で簡単な工作機械の模型の組立(丸のこ)をしていた。この課題の最後の授業らしく、組立が終わった子は、バッテリーにつないで動くかどうか見ていた。なかには動かない子もいて、首をかじげたりしていた。2人ずつ並んで座り、それぞれ T・B セットとそれに付随している説明書を机の上に置いていた。

この T・B セットは学年によって異なり、学校から貸与されるようになっている。T・B 作業は4～6年生で行われるが、7年生の段階でも視聴覚的に見せるというところでは、T・B を使っている。学校でやるのと同じように教員が初めに行ってみせて、作業原理を実地教授する形で、水準器を作るセットとかいろいろな電気器具を作るも

の、鉄工関係のものとかを、適宜使ってやっている。T・B は教師も生徒と同じものを使用し、それぞれの組立の説明書を見させ、必要なところは板書して、生徒たちにやらせる方法をとっている。実際に小さなセットを使って、どのように授業を進めるかに関しては、地域で工作関係の担当教官の合同会議があり、そこでお互いの経験交流をし、改善していくようにしているということである。この教室には、T・B を組み立てたモデル、映写機、OHP などが置いてあった。

#### (4) 見学を通して感じたこと

オーバーシュレの工作室を見学して感じたことをいくつかあげてみたい。

まずはじめに、生徒の人数が少ないということである(写真4)。半クラスでしていたので、生徒15人に教師1人という非常に恵まれた条件である。学級の人数の多少は教育の中味にも影響を及ぼす。どんなにやる気をもって熱心に教育に取り組んだとしても、15人を教える場合と、30人、40人を教える場合とでは、一人ひとりの子どもへの目の届き方は異なってくるのである。清原自身の幼稚園での経験からいっても、幼児が15人の時と、20人、30人の時とでは、一人ひとりの状況の把握と働きかけの度合いが異なってくる。15人と机間巡視をしながら、ちょっとした助言・示範など、一人ひとりに対して十分に対応することができる。見学中に、マト



写真4 10年制学校の授業風景(提供：清原みさ子)

リョーシュカのヤスリがけをしている途中で、教師に教えてほしいところがあった女の子が手を挙げた。それも自分の場で黙って手だけ挙げるのだが、教師はすぐやってきて、削り方をして見せていた。日本でも、技術・家庭科を半クラスで行っているところもあるが、特に実習系の教科の場合は、安全のことも含めて人数の問題は大きい。

次に、子どもたちの表情が明るく生き生きしていたことである。大勢の外国からの見学者を前にしても、物おじしない。なかにはカメラを意識してちょっとポーズをつかった子もいたが、ふだんと変わらないと思える様子で作業を進めていた。手つき、作業進度を見ていて、男女差がないし、女の子も生き生きとしている。この点は、午後からの実習工場場で特に強く感じた。女の子もヘルメットをかぶり、ごく当り前の顔をして機械類を扱っていた。道具や機械を扱うことにおいて、男女を分けて考えてはいけなと強く感じた。日本では、まだまだ、工作が好きなのは男の子、機械いじりが好きなのは男の子という見方がある。女の子が好きなのは人形遊びやままごと

というような、小さい時からことさら性差を強調した考え方は、人間の発達を阻害するものでしかない。生物学的男女差を否定するつもりはないが、ごく一部のところを除いて男女別学で、男は技術科、女は家庭科と分けられて学習の機会もない日本の現状を考えると、女の子がヘルメットをかぶって工場で実習している姿は非常に印象的であった。

それから、T・Bと道具について触れておきたい。学校で使うT・Bは、学年によりきっちり決められている。学校用T・Bは、デパートなどで売っているものより大型のものがあるのではと思っていたが、そうしたものはなかった。小さなT・Bで機械模型組立や電気模型組立をして、機構などについて学んだことは、あとで工場実習することにより、生きてくるのだと感じた。日本はDDRと社会体制が異なり、工場での生産実習を教育的に行うことなど、現状ではほとんど考えられないので、T・B自体を移入することはできるが、その場合は、日本の現状を考えあわせ、小さなT・Bで模型を組み立てることの位置づけをはっきりさせる必要があると思う。それから、こうしたT・Bは、デパートやおもちゃ屋で売られていて、ほしければ買うことができる。値段も大きさによりいろいろだが、日本円で1,000～3,000円のものが多いようである。DDRの庶民の収入は日本の約半分だが、医療費、学校教育費(給食一部負担金をのぞく)は無料で家賃も安いので、そう高くない。

道具も、デパートやおもちゃ屋でセットになったものが売られている。セットは何種類かあり(私が見たのは5種類だった)、それにより入っているものが少し異なるが、のこぎり、かなづち、やっこ、ヤスリ、のみ、ハンド・ドリルなどがある。ただし、かなづちはしばらく使っていたら頭が抜けそうなものだし、のこぎりも切れ味のほうはどうもよくない。それは、DDRの産業状況とも関わっていると思われる。子どもの道具だけでなく、家庭用品でも安い、木製のものを除いては良いものは少ない。DDRにはまるで問題がないわけでないのはもちろんで、こうした道具の質の改善という問題はあるが、子どもの時から、欲しければごく身近で買うことができ、ふんだんに道具類に触れる機会が保障されているというのは、すばらしいことだと考える。

また、おもしろいと思ったのは、道具の話が載っていて後ろにその道具がついている絵本(たとえば、子ども用の鋸がついた鋸についての絵本)が売られていたことである。ついでおもちゃのことに触れると、なるほどと感心できるものがある反面、テレビ・キャラクターの人形があったり、モデル・ガン、戦車のミニチュアなどが並んでいたりする。ただ、T・B(金属製だけでなく、プラスチック製、プラスチックと木を組み合わせたものなどがある)をはじめ、手・指を使うものは種々あるし、良いものが少なくない。

## ■ DDRの教育に関する状況の一端

諸国民友好学校で聞いた説明や質疑応答のなかから、『ドイツ民主共和国の総合技術教育』(民衆社)に載っていることとダブらないようにして、いくつかの問題について紹介する。話題は、評価、課外活動、進路指導、道徳教育、障害児教育、針仕事、

T・Bなどの研究・開発についてなど、多様であった。

まず評価に関してだが、前にも少し触れたように、5点法の絶対評価で、国で統一した基準がある。1と5を決めるのはたやすいし、はっきり決まっているが、その間をどうするかは、かなり教師の自由裁量に任されている。成績評価は、学力の現在の水準がどうなっているかということだけではなく、教育的な手段として行うという意味があるので、やる気のなかった子どもが一所懸命やり出し、まだただけだが、よくやったという時には、それなりに認めてやる。こうした学童に与える評価とは別に、学力水準の全体的分析を郡または県単位で行っている。これは、非常にきっちり点を決めて客観的測定としてやり、学力の問題を考える資料とする。実際に学校で仕事をすると、成績の数字を最終的な判決みたいな形で出すのは効果がないとわかる。実際にこの半年、このところは非常によくやった、ここは努力したがうまくいかなかったという成績の中味を生徒と話し、ほめた時の効果をテコにしていく。成績は、1、2、3、4、5のスタンプをポンポンと押していくのではなく、それを生徒との話の1つの糸口にするという形で取り扱っている。成績と関連して、DDRの学習指導要領には、全体の教科プランの中で確定した段階目標がある。これは、普通に成育している子どもたちなら、だれでも到達できるところで考えてある。したがって、10年制義務教育の終りまでに、必要な知識を身につけさせるのは、教育者にとって可能であることがはっきりしている。だが、頭で考えてこの目標は到達できるということと、実際に生徒が成長過程で到達してくれるということは別で、10年制の目標に到達できない層がいる。いわゆる落ちこぼれで、今は平均して1.4%で、まあ少ないほうだと思うが、教育課程をもっと努力改善して行って、落ちこぼれを救いあげるようにしたいと考えているということであった。

次に教員の労働条件だが、45分の授業が1時間分で、1週間の担当時間は、8年生までは24時間、9、10年生は22時間となっている。ただし、子どもが2人いる女教師は、それより2時間少なくなっている。1ヵ月に1回家事労働のための有給休暇、1週間に2日は午後の時間がないように、女教師には配慮されている。子どもができた場合は、優先的に託児所、保育園に入れられる。教員の中の女性の割合は約60%と、DDRも女教師が多い。これは教員のみで、学童保育で働いているのは、ほとんど全員が女性である。第9回党大会(1976年)後、組合と党の話し合いで、産前産後休暇は26週、希望者は1年間の育児休暇が取れるようになっている。子どもが病気をした時、家族の中に看病できる人(たとえば祖父母など)がいない場合には、医師の診断書があれば、病欠扱いで有給休暇が取れる。これは夫も取ることができる。日本に比べると、DDRの教員の労働条件は、はるかに良いと言えそうである。特に女性保護という面では手厚い。ただ、家事休暇など男性も取れるようにしないと、家事は女の仕事という通念(ソ連をはじめ、社会主義国でもかなり残っているという)を助長することになりかねない。母乳を与えること以外の育児には当然男性も関わるべきで、育児休暇もやはり男性も取れるようにしていく必要があると思われる。

最後に、T・Bに関してだが、こうしたセットを開発する仕事には、現場の教育者、

いろいろな技術部門で働いている専門家が協力してあたってている。こうしたセットが考案されると、教育科学アカデミーの付属学校施設で実際に使ってみてテストされる。そして、これで良いということになると、あとは DDR 国内の各学校に、授業に必要な数だけ無料で配付される。生徒は、それぞれの学年に応じたセットを1年間貸与される。ついでながら、教科書も貸与になっていて、1年間使用したら返す。線を引いたり書き込みをしたいと思ったり、復習したいと思ったら、別に教科書を買うこともできる。ノートなどは供与になっている。学用品などは無料なのでロスが多い、という安井氏の話であったが、そうした問題はあっても、義務教育無償を法で掲げながら現実はそうでない日本とは随分異なっている。

## ■ DDRの2回の視察旅行後の視察

1986年3月26日～4月4日にかけて、産教連主催で沼口博前委員長が中心となって、スウェーデンのリンシェピン大学のスロイド研究所、基礎学校のスロイド(工作・工芸科)教育の視察旅行を20名で行っている。

また、友誼団体の技術教育研究会(略称、技教研)が、1992年3月下旬～4月初めにかけて、20数名でロシア連邦のハバロフスクを訪問し、ハバロフスク鉄道大学(3月31日)など、技術教育関係を中心とした12の教育施設を視察している。

### <文献紹介>

1) この本の「序にかえて―日本の民主的教育改革をめざして―」の最後に、「……私たちは、団員を募集し、打合せを行い、ドイツ語を勉強し(これは、あやしいものですが)、50万円近いお金を蓄積するなどして準備をしました。この視察旅行は「産業教育研究連盟」が企画したのですが、友好的な関係のある他の団体である「技術教育研究会」「子ども遊びと手の労働研究会」「全国農業教育研究会」などの中心的な方々も参加されたことは、民間教育研究団体の連帯のためにも、うれしいことでした。「総合技術教育視察団」といっても、当然のことながら、その背景となっている「社会主義国」の理論と現状も学ぶことになりました。しかし、社会主義のことは何でも讃美するという態度ではなく、あくまでも日本の教師としての自主性を崩すことなく、受けとめてきたつもりです。1977年3月27日に出発し、予定より1日遅れて4月6日に帰るまでの私たちの体験は、すべてが新鮮で楽しいものでした。このような事業は、日本の民間教育運動の歴史の上でも、初めてのことでしょう。この度、この記録を一冊の本にまとめることになりました。この本が、これから日本で教育をどう改革していくかを日夜考えておられるみなさんの参考になればありがたいと思います。また、その団体の常任委員だけが行ったのではなく、広く団員を募集して、教師集団として行ったことも新しい試みでした。

日本の教師の気概を示した事業でもあったと、いささか自画自讃している次第です。読者のみなさんから、いろいろなご意見の寄せられることを期待しています。

編集委員一同」と、記している。

## ■ 桜の植樹のその後の様子

……………2026年2月25日

山に桜を植えてから3年が経ちました(編集部註：農園だより No. 62、産教連通信 No. 246 2023年4月20日発行を参照)。その後の桜の状況はどんな具合でしょうか。下に示すような案内も出しました。近くに来られた際には立ち寄ってみてください。念願の桜餅をこの山の桜の葉で作ってみようと思います。



倉敷里山の会

## 桜まつりへのご案内

春風に誘われて、桜の園へようこそ。  
やさしい春の陽ざしの中、満開の桜とともに、  
のんびりお花見しませんか？自然に囲まれた「桜園」で、  
心もほっこり、笑顔あふれるひとときをご一緒に。



私たち39人は栗坂の里に緑を取り戻し、住みやすい街づくりのために80本の桜を植樹し育ててきました。植樹から3年、まだまだ若木ではありますが、成長の様子をご覧ください。

**開催：令和8年4月5日(日)**  
**日時 13:30～15:30**  
**会場：倉敷里山の会『桜園』**  
岡山市北区大内田三谷1367-20  
**集合：岡山コンベックス東駐車場**  
**自販機前(目印旗あり)**  
**13時までに集合ください**  
**案内誘導：13:10出発**

**参加費：無料**

問い合わせ先：倉敷里山の会 事務局  
090-3922-2790 (赤木俊雄)



ヨウヨウ



ソメイヨシノ



カワサザクラ



オオシマザクラ



ヤマザクラ

桜園には5品種、約80本を植えていますが、品種により開花時期が異なりますことをご確認ください。

会場・集合場所案内図



## □ 常任委員会が行われました

3月下旬に常任委員会が行われました。この場で話し合われたことの中から、何点かをお知らせします。

\*今年(2026年)の夏の研究会(第75次技術教育・家庭科教育全国研究会)について

- ・ 8月1日(土)午後、2日(日)午前という一泊二日の日程で実施する。
- ・ 場所は昨年と同じ東京都教職員組合北多摩西支部北多摩西教育会館とする。Webによる参加申込みは6月1日(月)からを予定している。
- ・ 内容は、普遍的原理に基づいた教科体系の構築内容と次期学習指導要領で示される教科内容との比較検討、各種授業実践を産教連の研究活動の歴史から比較検討する、などを予定している。

\*今後の活動とそれにかかわる連盟総会について

- ・ 連盟総会は、8月1日(土)、8月2日(日)の両日ともに、例年より多くの時間を設定(60分ないし90分程度を予定)し、その中で今後の活動を含めて討議する。ここで提示する今後の活動内容案については、開催案内とともに事前に会員に配付する。

\*産教連通信について

- ・ 「技術教室」誌が休刊になった当初と比較すると、掲載記事用の原稿は少なくなっているが、担当者の知恵と工夫により定期発行(現在は年4回)を維持している。

### ▲ 日本民教連とものづくりネットワーク

会員の皆さんは、産教連が「日本民間教育研究団体連絡会(日本民教連)」の加盟団体の一員であり、「生活やものづくりの学びネットワーク」という組織にも加盟しているということをご存じでしたか。

日本民教連の大事な活動の一つが、情報交換を行う会議のために、加盟団体の代表が毎月1回集まることです。また、ものづくりネットワークは2010年9月に設立された、比較的新しい組織です。日本民教連、ものづくりネットワークのどちらも定期的に広報誌を発行しています。

以下の URL から、この二つの組織にアクセスしてみてください。

日本民教連 : <https://minkyouren.jimdofree.com/>

ものづくりネットワーク : <https://ss1.xrea.com/seikatsunet.g3.xrea.com/> (編集部)

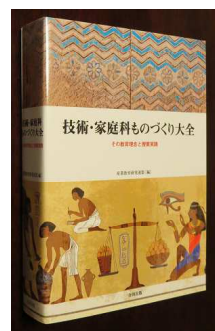
## 「技術教室」「技術教育」全号公開

産教連が編集していた「技術教室」誌が休刊となって(2011年12月号にて休刊)からすでに14年以上が経過しています。この間、新潟大学教育学部の鈴木賢治氏および同学部技術科の学生の尽力により、「技術教室」ならびに「技術教育」の公開版が完成の運びとなっています。技術教育・家庭科教育の実践・研究に大いに役立つものと期待されます。産教連のホームページからアクセスできますので、ぜひご利用ください。  
(編集部)

## 『技術・家庭科ものづくり大全』が刊行されました

2021年8月、産教連編による『技術・家庭科ものづくり大全』が合同出版から刊行されました。70年にわたる産教連の研究と実践の活動の集大成ともいべき書籍で、A5判、656ページの大著(定価：本体3000円＋税)です。

学校現場で技術教育・家庭科教育に直接携わる教員だけでなく、技術教育・家庭科教育に関する研究者やものづくりに関わりのある多くの方々が本書を手にすることを希望しています。



## メーリングリストの積極的な活用を

今や、インターネットの利用は当たり前です。「最近、図書館でこんな本を見つけました」「こんな情報を耳にしたのですが、もっと詳しいことを教えてください」というようなことを産教連ネットへ載せることで、情報交換の輪が広がります。

産教連ネットに情報を発信することが活用の第一歩となります。この産教連通信でも、産教連ネットへ発信された情報を編集し直し、「会員からの便りを紹介します」というタイトルで、随時、紹介していますので、参考にしてみてください。

産教連ネットへの登録手続きについては、まずは事務局へご連絡ください。連絡先は本号の最終ページに記載されています。  
(編集部)

## □ 編集部ならびに事務局から

産教連通信の執筆要項を産教連のホームページ上で公開しています。この規定に沿って、原稿をお願いします。原稿の送付先は編集部(下記参照)です。会員の皆さんの寄稿を待ち望んでいます。

さて、コロナ禍のなか、2021年夏に開催された連盟総会で、今後の活動規模を縮小することが決まり、実行に移されています。皆さんがご覧になられているこの産教連通信も、それまでの隔月刊(奇数月発行の年6回)から季刊(年4回の発行)に変更になり、5年近くを経過しようとしています。

ところで、事務局や財政部などから出された郵便物が宛所不明で戻ってきってしまうことがたびたびあります。それが日常の活動に関する重要な文書だったりすると、会員の皆さんにとっては不利益を被ることもあるかと思います。どうぞ、**人事異動や転居などで住所・電話(FAX)番号・勤務先などに変更があった場合には、お手数でも、すみやかに事務局(下記参照)までご連絡をお願いします。また、メールアドレスの変更についても、同様にご連絡くださるとのりありがたいです。**

### 編集後記

いま、次の学習指導要領改訂へ向けて、中央教育審議会(中教審)で審議が進められています。これまでの中教審の議論の中で、すでに「現在の技術・家庭科を家庭科と情報・技術科(仮称)の二つの教科に分離すべき」との方向性が示され、現在は初等中等教育分科会教育課程部会の下に設置されているワーキンググループの会議で教科内容などの細部について議論が進められている段階です。

職業・家庭科が1958年告示の学習指導要領で技術・家庭科に変わってから70年近くが経過し、ここでまた教科が大きく変わろうとしています。100年足らずの間にこれほど変化をする教科が他にあるでしょうか。

皆さん、今年8月はじめに開催を計画している全国研究会で、大きく変わろうとしている技術・家庭科の授業について、産教連が過去の研究活動と授業実践で積み上げてきた実績も踏まえ、議論してみようではありませんか。(金子政彦)

産教連通信 No.77 (通巻 No.258)

2026年4月20日発行

発行者 産業教育研究連盟

編集部 金子政彦 〒247-0008 神奈川県横浜市栄区本郷台5-19-13  
☎045-895-0241 E-mail mmkaneko@yk.rim.or.jp

事務局 野本恵美子 〒224-0006 神奈川県横浜市都筑区荏田東4-37-21  
☎045-942-0930

財政部 藤木 勝 郵便振替 00120-8-13680 産業教育研究連盟財政部